

食と卓越化

——その正統化の様式に関する考察——

慶應義塾大学 村井重樹

1 目的

本報告は、食をめぐる実践と卓越化との関係を、その正統化の様式に着目しながら考察することを目的とする。言い換えれば、本報告は、人びとによって日常的に遂行される食の実践が、われわれの社会のなかで、いかにして卓越化に寄与し、またそれがいかなる正統化の様式にもとづいてなされているのか、を探究しようとするものである。

2 方法

こうした食の実践と卓越化の関係性という問いを、社会学の問題として明確に打ち出したのは、P・ブルデューである (Bourdieu 1979=1990)。それゆえ、ここでは、ブルデュー理論を考察の基点とする。ブルデューは、『ディスタンクシオン』において、人びとの文化的実践に「贅沢趣味」と「必要趣味」の対立を見だし、それが「必要性への距離」の大きさによって決定されるということを示した。ブルデューにしたがえば、このことは、食の領域に対してもあてはまるものであり、そうした正統化の様式を通じて、食をめぐるさまざまな実践（食料消費や飲食の仕方など）が、社会階級的位置に応じて差異化＝卓越化されると主張した。こうしてブルデューは、それぞれの社会階級に応じた食の実践を描き出し、そこに卓越化の論理が介在していることを明らかにしたのである。

3 考察

しかし、以上のようなブルデューの文化的実践の理解に対し、近年において重要な問題提起を行なったのは、文化的オムニボア論である。文化的オムニボア論においては、「スノップからオムニボアへ」と言われるように、ハイカルチャー／ローカルチャーと支配階級／被支配階級との対応関係がすでに明確なものではなくなり、とりわけハイカルチャーを消費することが卓越化と直接的に結びつくものではなくなったと主張されている。とはいえ、そこでは、高地位者による社会階級的位置を越えた幅広い多元的な文化的実践が見いだされているものの、どのような様式のもとに卓越化が働いているかは十分に明らかにされていない。ゆえに、本報告では、ジョンストンとバウマンの研究 (Johnston and Baumann 2007; 2010) に依拠しながら、食の領域において、そうした卓越化が、いかなる正統化の様式にもとづいて導かれているかを検討していく。これらの研究によれば、その主要な軸を構成するのは、真正性 (authenticity) とエキゾティシズム (exoticism) である。

参考文献

- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Les Editions de Minuit.(= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判 I・II』藤原書店)
- Johnston, J and Baumann, S., 2007. "Democracy versus Dinstinction: A Study of Omnivorousness in Gourmet Food Writing." *American Journal of Sociology* 113: 165-204.
- , 2010, *Foodies: Democracy and Distinction in the Gourmet Foodscape*. Routledge.
- 村井重樹, 2012, 「ハビトゥス論の現代的課題——集団から個人へ、あるいは統一性から多元性へ」『哲学』第 128 集: 87-108.